覚書「米墨戦争小史」

牛島　万

Memorandum on the Gereral History of the Mexican-American War

Takashi Ushijima*

The Mexican-American War (1846-1848) was an extremely remarkable event for both Mexico and the United States of America, and makes a huge impact on their political and economic evolution. The U.S., which was the winner of this war, made Mexico cede California, New Mexico to the U.S., concluding the Treaty of Guadalupe Hidalgo in February 1848. The U.S. also obtained Oregon from Great Britain in 1846. The U.S. had completed the establishment of its Continental Empire, and this can be seen in the sudden elevation of Manifest Destiny. Therefore, in this war, the U.S. established the basis on which in the future it would continue on its way to world hegemony. The U.S. obtained a huge territory, namely, the West, expanded its domestic commerce, and enlarged its industrial sector in about thirty years after the war.

In contrast, Mexico, defeated in this war, was not only forced to decline the country's force, but also to continue its political disorder after the war. Continuing internal conflicts and intervention by foreign countries promoted Mexico's economic underdevelopment. On this point, the Mexican-American War signals the beginning of a pessimistic history, and the gap which continued between the two countries remains now even after more then 150 years. For these reasons, an understanding of the Mexican-American War is essential to an understanding of the general relations between two countries.

(＊城西国際大学専任講師・研究員)

はじめに

2001年9月11日にアメリカ合衆国（以下，米国とする）で勃発した同時多発テロ事件は未だわたしたちの記憶に新しい。この度の，テロ事件の報復を目的に開始された対アフガニスタン戦争を見てもわかるように，戦争と平和は，同じ一枚のカードの表と裏の関係のように位置づけられる。つまり，どちらかのカードを出すことによって，もう一方はいとも簡単に失われるが，他方，戦争は平和の確立のために行なっているという面があり，両方の連関を無視できないのである。さて，第1次大戦以降，19世紀以来大英帝国と称し繁栄をきずいてきたイギリスを筆頭に，多くの欧州諸国が政治的経済的な後退を余儀なくされる一方で，これにかわるワールドパワーとして登場してきたのが米国であった。米国はかつてのイギリスのように，世界中に広大な植民地を獲得することはなかったが，政治や経済の面でほとんど常に世界をリードしてきた。したがって，一見米国とは直接的には関係がない地域紛争にも同国の権益が関係している場合が多く，米国は，これを擁護するため，あるいは国際平和の維持という自らの使命観から軍を配置し，時には武力行使に出ることを幾度となく経験してきた。また反対にこのような米国の行為に対する反米感情が高まり，これが米国や米国人に対する攻撃に結びついた例は枚挙にいとまがない。

ここで興味深いことは，アメリカが宣戦布告をする場合，概して開戦の正当性を明らかにするために，報復攻撃を戦争の理由として取り上げる場合が多いことである。米国史上，自国の領域内で米国人が犠牲となった三大事件として，アラモの戦い（1836年），メイン号爆破事件（1898年），真珠湾攻撃（1941年）が上げられる。事実，それぞれについてはRemember the Alamo!, Remember the Main!, Remember Pearl Harbor! という標語が存在しており，米国人の痛恨の念の大きさを知ることができる。独立戦争（1776年）や英米戦争（1812年）のような自国の植民地解放戦争や，ベトナム戦争や中米紛争などの，国際平和と自国の権益のために米国が買って出た，いわゆる「代理戦争」をのぞくならば，報復を謳った戦争は決して少なくはない。その意味で本稿で取り上げる，1846年4月（米国側の宣戦布告は5月13日）に始まり，1848年2月で終結した米墨戦争（メキシコ戦争）は，アメリカにとってはじめての対外戦争であったが，まさに報復戦争を主張して起こったものであった。同戦争でアメリカは，メキシコ軍が米国領内に侵入し，米兵に死傷者が出たことをもって宣戦布告の理由にしているのである。当時の米国大統領ポーク（James K. Polk）は戦争教書で次のように述べている。

「デルノルテ[1]の国境から最新の情報が届く以前に，すでに堪忍袋の緒は切れていた。威嚇が何度も繰り返された末，現在，メキシコは米国との境界を突破し，わが国の領土に侵入した。そこで，米国の土地で米国人の血が流されたのである。メキシコは，戦闘行為が開始され，両国は戦争状態にあると公式に発表している。

わが国は戦争を回避しようとしてきたにもかかわらず，戦争が起こり，メキシコ自身の行為によってそれが存在している以上，わが国が自国の名誉，権利，権益を真剣に擁護することが，全ての国民の責任と愛国心によって求められているのである」[2]

これまで米墨戦争は多くの学者によって研究の対象に取り上げられてきたが，戦争が終結して150年以上が過ぎ去った現在，いや，開戦当初からすでに，米墨戦争が単にメキシコに対する報復のための戦争ではなく，より重要な，自国の権益確保のための積極的な戦争であったことは，メキシコ人だけでなく，米国人のなかでも認められることであった。しかしながら，このことを米国人が公にするには戦後しばらくの時間を要した。なぜなら，戦争研究が当事国の戦争責任を追求するものになる場合，これが国家に対する批判として受け取られ，言論の自由が制限されることも少なくないからである。また，米墨戦争が米国の膨張主義政策に基づいて開始されたという見解は今日では一般的になっているが，とかく一つの出来事を総合的に評価，分析するには一定の時間の経過を必要とする。たとえば，米墨戦争終結から13年後の南北戦争，あるいは，50年後の米西戦争を体験することで，これらの戦争との関連性が考察でき，米墨戦争の背景がより明確になってくるものなのである[3]。

概して，平和主義者は戦争を否定的にとらえ，戦争の皆無な状態を理想としているのに対し，現実主義者は，国家間の勢力均衡を成立させているのは，軍事力や経済力などの国力の大きさであり，この均衡を崩そうとして国家間の戦争は起こるのだが，別の見方をすれば，この関係を維持するためにも戦争は有効な手段であると考える。しかし，両者があまり指摘していないことは，開戦当初において，戦争に対する一定のコンセンサスが確立していたにせよ，戦争の経過とともにそれが変化する場合が多いということである。つまり，概して，戦争熱が高まったあとには平和への渇望が必然的にやってくるのである。また，戦争が長期化すると，政策決定者，一般の国民，戦場で活躍している軍隊とのあいだにも摩擦が起こり，戦争に対する考えに変化がでてくるのである。同じ軍隊の上官と歩兵との間もしかりである[4]。

米墨戦争は1年10ヶ月という長い歳月を経て，1848年2月のグアダルーペ・イダルゴ講和条約の締結でその幕を閉じたが，この条約の成立は戦争の長期化とあいまって，米墨双

方に妥協と和平の確立を急ぐ気運が高まってきたから成立したものである。本稿は，戦争の通史を述べるものであるが，とりわけ，平和に対する期待はどのようにして生まれてきたのか，について論じてみたいと思う。まさに社会の歴史は「戦争と平和」の繰り返しのプロセスであることを改めて認識することになる。

1. 米墨戦争を回避できなかった理由

「米国の土地で米国人の血が流された」という一節で有名な，前述のポーク大統領の戦争教書はただちに米国議会で承認された。そして1846年5月13日，米国はメキシコに対し宣戦布告をするに至ったのである。戦争教書にあるように，メキシコが先制攻撃をしたことは，ある意味で事実である。というのは，先制攻撃とは，係争地域へ先に進駐することではなく，進駐したあと結果的に何らかの危害を相手軍に与えることである，という規定でいえば，まさにメキシコの先制攻撃が批判されてもいたしかたがないからである。だが同規定を設けなければ，メキシコの宣戦布告の内容にもあるように，先制攻撃は米国によってはじめられたものであるといえる。なぜなら，係争地域に先に進駐したのは，紛れもなく米国軍であったからである。メキシコ大統領パレデス（Mariano Paredes y Arrillaga）は，ポークの宣戦布告に先立つ，4月23日には事実上の宣戦布告をおこなっている。

「米国軍がすでに侵入しているメキシコ領土の防衛は緊急を要することである。国民のまえで，私が敵軍の撤退を命じなければ，この責任は重大であろう。したがって，私は敢えて命を下すことにした。今日から自衛のための戦争がはじまる。侵略や攻撃の可能性のある，わが国の全拠点を断じて防衛するつもりである」(5)

ここからわかることは，同布告がすでにメキシコ領域内に侵入している米国軍の存在を如実に表していることである。この背景についてもう少しみておこうと思う。テキサスは1835年にメキシコからの独立を宣言し，テキサス共和国を建国（1837年）したが，8年後の1845年には米国に併合された。メキシコ政府はテキサスの独立および米国によるテキサス併合を認めていなかったが，かりにこれが認められたとしても，メキシコとテキサスの境界をヌエセス河にするのか，あるいはリオ・グランデにするのかという，いわゆる境界問題が残っていたのである。テキサス併合後，境界問題は米墨関係をより悪化させ，最終的に戦争の要因に結びついていったのである。つまり，戦争前夜の1846年3月4日までは，ヌエセス河とリオ・グランデの間は係争地域であったために，両国軍が侵入することはなかったのである。係争地域へ侵入することによって，相手国に戦争を誘発させる可能性が

あるということを米墨両国は十二分に理解していたはずである。ところが，3月4日，米国テイラー（Zachary Taylor）軍はそれまで野営していたヌエセス河河口のコーパスクリスティを出発し，遂に係争地域へ進駐したのであった。まさに米国軍が先手をとったことになる。そして同月24日にはリオ・グランデ河口のプンタ・イサベルに，さらに28日にはリオ・グランデに到達していた。リオ・グランデ河岸にはメキシコのマタモロスという町があったが，リオ・グランデをはさんでその対岸にブラウン要塞を創設し，テイラー軍はそこに布陣したのである。そこで，メキシコ政府はテイラーに対し早急に係争地域からの撤退を要求し，もしこれに応じない場合，メキシコ軍は米国軍と即座に戦う構えを見せテイラー軍を威嚇した。しかし，テイラーはこれを無視し続けた。こうして，4月24日，メキシコ側は自衛のための戦争を余儀なくされたとして，北方師団総司令官アリスタ（Mariano Arista）の指揮下でトレホン（Anastasio Torrejón）将軍が，テイラー軍に最初の攻撃を加えたのである。この結果，11人の死者と4人の負傷者が米国軍に出たのだが，このことがテイラーによってワシントンに報告された。そして，米国政府は，メキシコ軍の方から米国軍を攻撃し米国人に死傷者が出たことに対する報復を理由に宣戦布告に至るのである。

以上のことから，米国は係争地域に侵入することでそれまで以上にメキシコを威圧し，メキシコ側に戦争を誘発させようとしていたのではないかと考えられる[6]。1846年3月から4月にかけて，平和的解決のための交渉は決裂し，両国間に戦争の機運が生まれ，あとはどちらが先制攻撃に出るかまで来ていた。米国側は開戦のために議会での承認を必要としていたので，批准されるための正当な開戦理由を望んでいたのである。そこで，報復攻撃こそが戦争を正当化させる理由として適切であったのである。死傷者が出たというテイラー将軍の報告はポークにとって待ちに待った絶好の機会であったのかもしれない。

では序論に書いたが，米国を戦争に導いていった本当の要因とはいったい何であったのであろうか。それは1840年代に多くの米国人を魅了した西漸運動の高揚であった。この時代，あらゆる階層によって土地の獲得こそが国や国民の利益に直結するものと考えられていた。米国南西部に広がる広大な未開拓地への進出は，やがて1848年のゴールドラッシュに見られるアングロサクソン系の大移動などを通じて顕著なものになっていくのである。ところで，米国人が獲得したいと考えていた土地は一様ではなかった。テキサスのほかに，ニューメキシコ，カリフォルニアへの拡張を望むものもいれば，さらにはメキシコ北部，バハカリフォルニア，メキシコ市，ユカタン半島，そしてテワンテペック地峡に至る全メキシコの獲得まで主張するものもいた。ちなみに，このころからすでにキューバへの領土

獲得を期待する動きが一部に見られた[7]。ところで，彼らが未開の地として考えていた西部の土地には，少数ではあるが，原住民（インディアン）やスペイン人，メキシコ人が居住していたのである。しかも領域の大半にはメキシコの領有権が認められていた。だが，そこはメキシコ人が少なく，メキシコ政府の統治力が弱かったために，米国膨張主義の絶好の的になったとも考えられる[8]。

さて，このような米国の膨張主義を正当化する理念として，『デモクラティック・レヴュー』紙編集長オサリバン（John O'Sullivan）によって提唱されたマニフェスト・デスティニー（Manifest Destiny）があった。マニフェスト・デスティニーとは，ピューリタニズムの影響を受けたものであるが，アングロサクソン系の精神的物質的文化の優越性を再認識し，さらにはこれを未開で野蛮な地域に伝播することで，その地域の支配構造を打破し人々を解放すべきであるという，一種の倫理的使命観を帯びた領土拡張の原理であった[9]。オサリバンの提唱するマニフェスト・デスティニーは次第に多くの支持を集め，これはやがて他国の領土への侵入，支配を正当化するまでに発展した。他方，米国内には，他国への侵入は戦争を導くものであると主張し，戦争に断固として反対する党派や，反奴隷制主義者が存在しており，これらも同じ程度に支持を受けていた。開戦当初，マニフェスト・デスティニーを支持し，膨張主義を推進しようとする勢力の大半が南部のデモクラット（Democrat）であり，これが奴隷制地域の拡大につながることを危惧したのは，奴隷制反対者の多い北東部のホイッグ（Whig）であった。

2. 米国の膨張主義政策（Ⅰ）——テキサスと北部メキシコの征服——

米墨戦争前夜に米国ではメキシコ領の獲得を目標とする，いわゆる膨張主義への支持が高まっていたが，具体的にどの領域をどのように獲得するかについては議論の分かれるところであった。当初，その対象はメキシコ領テキサスに向けられた。1821年にスペインから独立したメキシコは，即座にテキサスへの入植を認めた。この入植者の大半は米国南部の出身者で奴隷制を支持するプランターであったが，彼らは綿花プランテーションの経営をテキサスで行うことを考えていた。土着のメキシコ人が少なかったテキサスでは，年月が経るにしたがって，米国系移民の数が増え，1835年までに約3万人に達していた（3～4千人の黒人奴隷を含む）[10]。1830年にメキシコ政府によって米国人の入植禁止令が発布されたこと，および1835年にメキシコがそれまでの連邦制から中央集権制に移行したことが引き金となって，米国系入植者の怒りが爆発し，同年独立運動が起こった。そこで，こ

れを阻止するために，メキシコ大統領サンタ・アナ（Antonio López de Santa Anna）は自ら遠征隊を結成し，翌年4月，テキサスのサンアントニオにあるアラモの砦に立てこもって交戦したテキサス人たちの大半を虐殺した。だが次のサンハシントの戦い（5月）ではサンタ・アナはテキサス軍の捕虜となり，メキシコ軍は敗退した。サンタ・アナは即座に解放されるが，それはテキサスの独立承認と交換条件でおこなわれた。テキサスはこの時点で米国へ併合されることはなかったが，メキシコから独立し，テキサス共和国を建国したのであった。

すでに40年代のテキサス共和国内において領土拡張の要求が高まっていた。彼らはニューメキシコ地方（当時のメキシコ領ヌエボメヒコ県）の獲得に大きな関心をもっていた。ニューメキシコのサンタフェは米国とメキシコの交易の中心地であり，米墨間の対立は激しくなっていたにもかかわらず，一般の商人には自分たちの利益獲得のために対外通商は不可欠であった。そのためにテキサス人や米国人はメキシコ政府による高関税の撤廃を希望していたが，実現しなかった。そこで，早くも1841年，テキサス大統領ラマー（Mirabeau Buonaparte Lamar）はサンタフェに遠征隊を派遣し，ニューメキシコ地方を占領し獲得しようとしたが，失敗に終った。しかし，その後もニューメキシコに対する要求は続き，米墨戦争前夜を迎えることになる[11]。

他方，1840年代の米国では南部のデモクラットはテキサスの併合を画策していたが，一方で，北部のホイッグの強い反対があった。ところが，1845年にはいり，北部のホイッグやデモクラットのなかに南部の要求であったテキサスの併合を支持するものが増えてきたのであった。この原因として，第一に，北部のなかでテキサスでの土地への投機に関心をもつ者が出てきたこと，第二に，西部に対する北東部や中西部の領土拡張の要求が高まってきたことが考えられる。この西部への拡張の到達点はカリフォルニアであった。米国人史家グレブナー（Norman A. Graebner）は，カリフォルニアの獲得は単に農業用地の拡大だけでなく，太平洋を越えてハワイ諸島や日本や中国などのアジア諸国との通商を将来的に展望していた北東部の商人たちの要求からおこったものであったと述べている[12]。このように，1845年は米国史上ひとつの転換期であったと考えられるが，大切なことは，テキサス，ニューメキシコ，アリゾナ，ネバダ，カリフォルニアという，今日米国の領土となっているすべての獲得要求が米墨戦争前夜において米国人のあいだに既に生まれていたことである。そして，これが実行されるのであれば，メキシコとの戦争は必至であったが，膨張主義を支持する米国人は米国側の勝利を確信していたのである。この理由として，メキシコ軍の戦力の乏しさという面だけでなく，米国人のあいだでメキシコに対するイメ

ージがすでにマイナスなものとして形成されていたことがあげられる。それは，暴君が無能な農民を支配する，野蛮な後進国としてのイメージであった。このようなメキシコのイメージは長期にわたって形成されたものであったが，そのきっかけは様々な情報や教訓・体験を通じて形成された。アラモでの屈辱，サンハシントでの勝利，人種的文化的優秀性（たとえば，宗教面では，プロテスタント信者の多い米国はカトリック信者の多いメキシコを他者として蔑視する。文化面では，アングロサクソン系文化がスペイン・ラテン系文化よりも優れたものであると謳う。人種的には，メキシコ人はスペイン人とインディオとの混血が多く，皮膚の色が黒人ほどではないにしても，褐色であり，非白人という意味で完全な他者である）などがそれに相当すると思われる(13)。

そこで，ポーク大統領は国民の膨張主義感情の高まりに応えて，まずはテキサス併合の承認を議会で可決することをめざした。そして1845年７月，テキサス共和国議会で米国への編入が承認されたのをうけて，米国議会でこれは可決された。しかし，テキサス併合をもって米国人の膨張主義感情は静まらなかった。このあと，ポークはテイラー軍をリオグランデの北を流れているヌエセス側河口のコーパスクリスティに布陣，またコンナー（David E. Conner）艦隊にベラクルス湾を封鎖させたのであった。これはテキサス以外のメキシコ領の獲得という野望を実現するための第一歩であった。そのうえで一方，ポーク大統領は全権公使スライデル（John Slidell）を派遣し，平和的解決をめざした。こうして同年11月末，スライデルは先にあげた獲得要求をもってベラクルスに到着したのであった。

ところが，メキシコは米国側が想像していたほど容易には米国側の要求を受け入れようとはしなかった。独立以来メキシコは党派間抗争で政治的に不安定な状況が続き，国内の安定が長く確立されなかった。そのうえ，メキシコは和平条約に合意することによる名誉毀損をかたくなに拒否しつづけたために，軍事面で不利な状況にあったにもかかわらず，メキシコは最終的に戦争を選択することになる(14)。こうして両国間で戦争が開始されたが，事実，米国軍が連勝を重ねていた。しかし，米国軍にも多くの死傷者が出ており，この意味で戦争の勝敗はむしろ互角であった。しかも，異国での自然環境や地理的悪条件に加えて，食糧や水などの救援物資の供給経路を確保しつづけなければならず，内地へ進攻し広範囲を占領下に置くことは容易なことではなく，精神的不安も相当なものであったと思われる。では，その過酷な戦争の歴史の詳細について年代順に論じてみようと思う。

■ **パロ・アルト**（Palo Alto）

1846年5月8日のパロ・アルトの戦いは米墨戦争はじめての本格的な戦いであった。米国軍は，2,111～2,500人，メキシコ軍は3,268人であった。それぞれの指導者は，前者がテイラー，後者がアリスタであった。人数的にはメキシコ軍の方が米国軍を上回っていたが，大砲数がメキシコ12門に対し，米国軍は20門で，しかも性能は米軍の方が良かったようである[15]。それは次の記述にも表れている。

「われわれよりも優れている米国側の砲兵隊はメキシコ軍に多大な損傷をあたえた。それは兵士たちが戦闘によって鎮圧されたことではなく，冷酷な血の海のなかで多くの者が殺されたあげくに屈服したことであった。無駄な流血を負わされた軍隊は敵の軍勢の前にまで行き，至近距離で勇敢に死ぬことを願っていた」[16]

また，戦いに参加していた米国軍陸軍中尉ダナ（Napoleon Dana）はこのようにも書いている。

「その戦いは恐ろしい光景であった。死体は無残にも切り裂かれ，負傷兵は助けを求めて叫んでいた。戦場にいた女性は，乳飲み子を膝でかかえながら，涙も流すことが出来ず，ぎゅっと［夫の］手を握り締めた。それから殺された自分の夫の髪に手櫛を入れ，血の浸たっている彼の唇に接吻するのであった。このすべてが私の望まない衝撃的な光景であった。われわれの戦争はそう長くは続かないであろう。メキシコ人はこんなことに絶えられずはずがないからである」[17]

パロ・アルトの戦いで犠牲になった兵士は，米国軍，死者11人，負傷者43人に対し，メキシコ軍は死者102人（上官4人を含む），負傷者153人（上官11人を含む）であった。医療班が到着せず負傷者を介護できなかったメキシコ軍の士気は下がっていた。そこで同軍は即座に撤退したのである[18]。

■ **レサカ・デ・ラ・パルマ**（Resaca de la Palma）

パロ・アルトの戦いで敗れたメキシコ軍はパロ・アルトから8キロほどの地点で，テイラー軍がやってくるのを待っていた。そこはレサカと呼ばれる，河水の侵食によってできた乾燥した川床で，曲折した溝が無数にできていた。マタモロスに通じる道沿いにそれは存在したが，その道路の一部の両脇に薮が広がっていて，そこにメキシコ軍は隠れていた。テイラー軍がやってきたとき，メキシコ軍は一斉に攻撃に出たが，メキシコ軍の大半が経験の浅い未熟な兵隊ばかりであったので，途中から恐怖で任務を放棄して脱走するものも多かった。やがて，メキシコ軍はリオ・グランデの河岸まで追いやられ，そこから先に進

めない多くの歩兵たちはリオ・グランデを泳いで渡ろうとしたが，その川底は深く，しかも軍服や武器を身につけたままであったために，多くが溺死した。米国軍は死者39人（上官3人を含む），負傷者82人（上官12人を含む）に対し，メキシコ軍は死者160人（上官6人名を含む），負傷者228人（上官23人を含む）であった。その日の夜，ライラー軍はリオグランデをはさんでマタモロス対岸にあるブラウン要塞にもどり，アリスタはマタモロスへ逃げた[19]。

5月10日，アリスタはマタモロスで軍の再編成を急いでおこなったが，同時に彼自身の統制力の回復と兵士たちの士気を高める必要があった。だが，彼らには2週間分の食糧とわずかな砲弾しか残されておらず，しかもテイラー軍がマタモロスを進撃してくることが予想されたことから，16日，アリスタは数人の部下との協議の末，テイラーへ休戦を申し出ることにした。しかし，テイラーはこれを認めなかったので，アリスタ軍は即座にマタモロスから撤退した。この際，負傷兵は移動に足手まといになると考えられ，これらはマタモロスに残された[20]。

5月18日，テイラー軍はリオグランデを越え，マタモロスを占領した。大砲などの兵器が放置されたままであった。メキシコ軍負傷兵は全て捕虜とされたが，その数は400人にも及んだ。ライラーは彼らに治療を施すように命じた[21]。

他方，アリスタ軍についてであるが，その後，道中で脱走する兵士が多く，アリスタ軍は1,000人までに減っていた。猛暑のうえに，飲まず食わずに移動しつづけていたために，軍隊はほとんど士気を失っていた。ヌトリアとエスペランサの間で，夜，スコールのような大雨が急に降ってきて，それ以上前進することは無理であると判断されたため，その場にキャンプをはった。この雨のおかげで，喉の乾きを潤すことはできたが，既に食糧が底をついていたので，荷車引きの大半の牛が殺された。このために，荷車を引く動物がいなくなったが，25日，アシエンダ・デ・ラ・バケーラで新たな動物と食糧を調達した。27日から28日にかけて，目的地のリナーレスまであと15キロのアシエンダ・デ・グアダルペで待機し，休養をとった。またリナーレスの村人に歓迎されるように，兵士たちは身なりを整えた[22]。

■ モンテレイ（Monterrey）

マタモロスの戦いが終ったあと，アリスタの手元に1通の文書が届いた。アリスタはトルネル（José María Tornel y Mendívil）戦争大臣から，メキシコ軍の連敗とマタモロスに部下の負傷兵を置き去りにしてきたことを批判され，北方師団隊長を罷免された。

後任にアンプディア（Pedro de Ampudia）将軍が指名されたが，彼はサン・ルイス・ポトシに赴き長期不在であったことから，代理としてメヒア（Francisco Mejía）将軍が任命された。テイラー軍がモンテレイを占領する計画をしていることを知っていたメヒアは出発の準備に余念がなかった。こうして北方師団は7月9日にモンテレイに向けて出発した。軍は総勢で1,898人であった[23]。

モンテレイは現在，メキシコ第三番目の産業都市としての立場を誇示しており，その経済規模はメキシコ市に匹敵するほどであるが，すでに米墨戦争期には北部メキシコの中心地として発展していた。メヒアはモンテレイに到着すると，物資の不足が心配されたので，メキシコ市の中央政府にその要請をおこなった。しかし，その回答は否定的なものであった。7月末から8月初めにかけて，パレデスが大統領を辞職し，後任の暫定大統領にブラボ(Nicolás Bravo）将軍が選出されたが，これはサラス（José Mariano Salas）将軍の蜂起によってすぐに倒された。このようにメキシコ市は政情不安の状態にあったので，議会も閉鎖されており，メヒアの要求を受け入れることはできなかったのである。8月20日，サラス政権下においてアンプディアは北方師団総司令官に正式に任命され，29日にモンテレイに到着した。

他方，テイラー軍はリオグランデに沿って総勢2万人が海路と陸路に分かれて進行していた。このなかにはテキサス出身の義勇兵がおり，彼らの中には，街道沿いの村々を襲い，村びとの金品や命を奪う者がいた。彼らは，Remember the Alamo！に象徴されるように，アラモの屈辱を果たすために，戦争はその復讐の絶好の機会であったと考えていたのである。しかし，これを見るに見かねたテイラーは早急にこれを取り締まった。米国軍のモラルの低下は，孤独と苦難をともなうことが多い異国の地において，戦況に応じて強者と弱者という完全な二項対立が成立してしまい，理性というものを失った前者が後者に対して虐殺行為や姦淫などのいわゆる動物的行為をおこなう場合が少なくないが，これが米墨戦争にも見られたということになる[24]。

9月21日午前7時，遂にテイラー軍はモンテレイに攻撃を始めた。モンテレイは東部と南部が東シエラマドレ山脈で囲まれ，その峡谷をサンタカタリナ川が走っていた。北部と北西部は平原が広がっているだけで，外部からの侵入を受けやすかった。しかし，実際にはテイラー軍は，北部，北西部，南部から分散して進撃してきたのである。結果からいえば，米国軍が勝利したが，この戦いに参加した米国人兵クリエ（Louisville Courier）は次のように書いている。

「21日午後，幾つかの砦があるが，われわれの砦の右側にいた時，私は，あるメキシコ

の女性が両国軍の負傷兵にパンと水を一生懸命運んでいるのを見た。次にこの救世主は水と食料を一人の負傷兵に与えようと彼の頭を起こし，さらに，その大きな傷口を自分の頭に巻いているスカーフで包帯した。ほかに食べ物に飢え苦しんでいた兵士たちがいたので，その人たちを救おうと，もう一度家にもどり，パンと水を取ってきた。再び私がもどってきた時，彼女は慈善事業を行っている最中であったが，やがて銃声が一発したので見ると，そこにはあの純真無垢な女性が倒れて死んでいた。銃弾が偶然にも当たったのであろうか。私はそれ以上のことは考えたくなかった。『ああ神様，これが戦争なのですか』。翌日再び同じ場所を通りかかった時，その亡骸は同じ場所に放置されたままであった。彼女の回りにはパンや割れた水瓶が散乱していた。そのなかには，まだ数滴の水が残っていたが，これは彼女の功績を象徴しているかのようであった。われわれは彼女を埋葬した。墓穴を掘っている間も，まるで氷が降ってくるかのように，回りに次から次へと大砲の玉が落ちてきた」[25]

22日，モンテレイ西部が米国軍の手中に入った。23日，米国軍は町の中心部まで攻めてきたので，昨日に続き，メキシコ側に多くの死傷者が出た。アンプディアはメキシコ軍の敗北を確信し，テイラーに休戦を申し出た。折衝の末，メキシコ軍が早急にモンテレイを米国軍に明け渡し，米国人捕虜の解放に応じることを条件として，7週間の停戦が約束された。こうして25日に，メキシコ軍はサルティージョに向けて出発した。

メキシコ軍は9月30日までにサルティージョに到着したが，早急にサン・ルイス・ポトシに集結することが命じられた。すでに8月中旬には，キューバに亡命していたサンタ・アナが帰国を認められ，ベラクルスに到着していた。彼は難局を乗り切るために呼び戻されたのであったが[26]，サンタ・アナはメキシコ軍の大半をサン・ルイス・ポトシに集結させたのである。彼はテイラー軍の覆滅に向けて総攻撃の準備に余念がなかった。

11月5日，テイラーはサンタ・アナに対し，同月13日が休戦期間の終了であることを伝えた。その2日後，米国軍はサルティージョを占領した。しかし，サンタ・アナはこの回答を無視し，できるだけ多くの時間を稼いだ。メキシコ軍再編成の過程で，戦争経験の浅い未熟な兵士が多く徴兵されたので，この強化訓練に時間がかかっていたのである。したがって，テイラー軍がサルティージョを占領したあとも，すぐにメキシコ軍が出撃してくることはなかったために，サルティージョの住民は多大な犠牲をこうむることになる。

■ サルティージョ（Saltillo）

米国軍の腹いせはサルティージョの住民に直接向けられた。一部の部隊が頻繁にサルテ

ィージョの住民を殺傷し，暴力をふるうようになり，軍のモラルの低下が目立った。とりわけ，テキサスレンジャー（Texas Ranger）の一部は，アラモの復讐とばかりに，無抵抗な住民を狙ったのである。テイラーはこれをやめさせようとしたが，完全に押さえることはできなかった。このような軍のモラルの低下はテイラーの統制力の低下にも結びつき，戦争を進めていくうえでも支障となった。しかも，このような米国軍の虐殺行為に憤慨したメキシコ人が自警団を形成し，ゲリラ活動を展開しはじめたことによって，テイラー軍は苦境に立たされたのである。メキシコ人ゲリラ集団は米国の救援物資運搬係の隊員を襲い，その供給経路を遮断した。また道中で米兵を襲い，手足を切断して殺害もした。場合によっては，ゲリラの矛先はメキシコ住民にまでおよび，米国軍に味方する可能性のある住民に同様の危害を加えた。他方，米国軍もゲリラ集団撲滅のために，彼らに加担する恐れのあるメキシコ住民を殺傷したのである[27]。ここで展開されたサルティージョの悲劇は，現代ゲリラ紛争における構図と全く同じである。

1847年1月28日，ついにサンタ・アナ軍はサル・ルイス・ポトシを出発し，サルティージョに向かった。2万人の兵士たちはいくつかのグループに分かれて出発したが，この他に多くの隊員の妻やその家族のものが同行した。サルティージョまでの距離は386キロで，しかも途中には広大な砂漠があり，食糧や水の調達にも困難が予想される過酷な移動であった。これに比べて，サンタ・アナ自身は全く優雅であった。同行者の記録によると，サンタ・アナは，出陣するというよりはまるでピクニックにでも行くかのように，あらゆる日用品を準備していた。例えば，銀製の茶壷，カットグラス製のタンブラー，金のデカンター，そして数人の女であった。歩兵の状況は最悪で，サンタ・アナのそれとは天と地ほどの差があり，彼らはテントやワゴンも持っていなかったのである。

バルボンティン（Manuel Balbontín）陸軍少尉は次のように書いている。

「非情に寒い。風が強く，雪が降っている。その晩，幾人かの兵士と女性が長い間寒い中にいたので凍死したのである。兵士たちは極度の空腹と麻痺状態にあったので，これ以上前進することを拒んだ」

まさに生死をかけて3週間移動した末，軍の総数は当初の2万人から1万5千人にまで減っていた。そのなかには途中の駐屯地に残されたものもいるが，これとは別に脱走兵や死亡した兵士が千人ほど含まれていた[28]。

他方，米国軍には大きな変化が生まれようとしていた。民主党のポーク大統領はこれまで膨張主義政策を進めてきたが，一方で，ホイッグ党をはじめ，この戦争と領土拡張策に

反対している党派も多かった。そして9月の議会選挙でホイッグ党の議席数は民主党のそれを上回った。早期の勝利と平和的解決を希望するホイッグのあいだでは，当初，うまく戦局を乗り越え連勝しているテイラーが次期大統領候補となるまでに人気が高まっていたが，戦争が長期化するにつれて，米国人の死傷者は増加の一途を辿り，ポークやテイラーを批判する動きが見られた。彼らのなかには，平和的手段を早急に準備すべきであるという考えと，現時点以上に，戦争の遂行を強化させるべきであるという2つの考えが存在していた。従来，ニューイングランドはホイッグの強力な地盤であり，戦争そのものに反対する勢力が強かったが，この時期，戦争による強攻策を主張するものが増えていた。ただし，ホイッグの場合，奴隷制を獲得領域に導入することには否定的であった。次に，これまでメキシコ領土の獲得に反対してきた南東部においても民主党内部に膨張主義を支持するものが増えていた。一方，戦争前夜から膨張主義を支持していた中西部や南西部においては，早急の領土獲得の要求が高まっていた[29]。彼らは戦争の遂行を強化させるだけでなく，獲得領域も拡大すべきであると考えていた。従来の，カリフォルニア（アルタ・カリフォルニア），ニューメキシコ（ヌエボ・メヒコ）以外に，バハ・カリフォルニア，さらには全メキシコの獲得まで要求の声が広がっていたのである。ただし，奴隷制導入に関しては民主党内部でも賛否両論があり，またこれが民主党分裂の要因になっていた。いずれにせよ，ポークは戦争を終結させるために，メキシコ市の陥落を急がなければならなかったのである。そこで，ポークはテイラー軍を北部戦線に配置したまま，これとは別にスコット（Winfield Scott）をメキシコ市の征服をめざす別の米国軍総司令官に任命したのであった。民主党のポークがなぜホイッグ党のスコットを指名したかについては，国民の人気がホイッグ党のテイラー一人に集中していたことから，次期大統領選で民主党が敗北することを恐れたポークが，故意にホイッグ党員のスコットを総司令官に任命することで，人気をスコットとテイラーに二分させようとする企みがあったといわれている[30]。

こうして1月初旬，スコットはメキシコ北部に上陸し，テイラー軍のおよそ半分の兵力を自らの軍に加えたのであった。テイラーはこれをあまり快く思っていなかったが，認めざるをえなかった。要するに，テイラー軍の規模は半減され，メキシコ内地に進攻することは困難になったのである。

■ アンゴストゥーラ／ブエナビスタ（Angostura/Buena Vista）

2月に入り，ライラー軍はサルティージョからさらに南下したところにあるアグア・ヌエバまで来ていた。しかし，やがてテイラーはサンタ・アナがこちらに向かって来ている

という情報を得たので，早急にそこから撤退した。サンタ・アナがアグア・ヌエバに到着したとき，テイラー軍は兵器などを残して，すでに慌てて逃げたあとであった。しかし，テイラー軍はアグア・ヌエバとサルティージョのあいだにあるアンゴストゥーラ(米国人はブエナビスタという）でサンタ・アナ軍がやってくるのを待っていたのである。アンゴストゥーラは一方に山と丘が迫り，他方に曲がりくねった水路が多数できており，両者の間は凹凸のある地形が続いていた。米国軍は小高い丘に陣どって，メキシコ軍の進攻を妨げた。初日の午後はずっと戦闘が続けられた。2日目早朝，米国軍が敵の陣地を見ると，豪華な装飾品を身にまとったカトリック神父の一行が，厳粛な生バンドの演奏にあわせて，メキシコ人兵士の勝利の門出を祝う儀式をしていた。やがて完全に夜が明け，メキシコ軍が攻撃を開始した。最初はメキシコ軍の方が優勢であった。アンプディア軍は山裾まで米国軍を追いやり，米国側の主要拠点もメキシコ軍が一応占拠した。ところが正午近くに，米国軍は立て直しをはかり，メキシコ軍の進撃に対抗した。その結果，その日の終わりの両軍の位置は最初の位置とほとんど変わっていなかった。こうして時は3日目を迎えようとしていた。

3日目早朝，米国軍が敵の陣地をみると，そこにはメキシコ軍の姿形はなかった。昨晩のあいだにサンタ・アナは撤退を命じたのであった。この理由については，幾つかの見解があるが，サンタ・アナ自身は自叙伝『鷲』のなかで，対戦中に受け取ったゴメス・ファリアス（Valentín Gómez Farías）副大統領からの伝達によって，メキシコ市がポルコ派（polkos）を中心とする反政府派との内戦状態に陥り，国家が非常事態であることを知らされ，サンタ・アナは政府軍の応援に向かった，とその理由を述べている[29]。他方，メキシコのテレス・イ・マサグエル（André Terrés y Masaguér）将軍はアンゴストゥーラの戦いの悲惨さを次のように述べている。

「その戦いは血なまぐさいものであった。両軍ともに地勢の許すかぎり接近して，このうえなく勇気をふりしぼって戦った。……午後3時頃，ひどい暴風雨が吹いてきたので，一時中断したが，台地には，戦争が再開されるまでには回復した負傷者もいたが，丘からくんできた水が血で染まっているほどに，死傷者でいっぱいであった。そして，われわれはその血の水を飲んだのである。困惑した大勢の喉の渇きはなんとひどかったことか」[32]

このことからもわかるように，実際にメキシコ軍は一部の歴史家が述べるほどには優勢ではなかったと考えられる。しかも，別の史料によれば，2日間も食糧や水がなかったという指摘もある。サンタ・アナが敗北を予想していたために，早急に撤退したという可能性が考えられる[33]。

アンゴストゥーラをあとにしたサンタ・アナ軍はサン・ルイス・ポトシから来た同じ道を逆もどりしなければならなかった。道中，アグア・ヌエバからラ・エンカルナシオンまでの砂漠地帯では，天候や地理的悪条件に加えて，飲まず食わずにひたすら目的地をめざしていたので，各人が自分の身を守ることだけで精一杯であった。このような状況のなか，彼らにはもはや人間性のかけらすらもなかったのである。重傷兵の介護を重荷に感じた多くの兵士たちは彼らの生死にかかわりなく，道中に置き去り，見殺しにしたのであった。アンゴストゥーラの戦いで米国軍は4,600人中，死者272人，負傷者387人であったのに対し，メキシコ軍は15,000人中，死者591人，負傷者1,048人，脱走兵約3,000人であった[34]。

3. 米国の膨張主義政策（II）——カリフォルニア・ニューメキシコの征服——

■ カリフォルニア（California）

米墨戦争前夜の1840年代前半には，カリフォルニアやニューメキシコに対する領土拡張の要求は漠然ではあったが，すでに一部のあいだで高まっていたように思われる。漠然であったというのは，これらの広大な地域がどのような場所なのかがほとんど情報として入ってこなかったからである[35]。この領域に居住する者は確実に年々増加していたが，その居住地は一部の地域に集中していた。そして居住地のまわりには，広大な自然と野蛮で好戦的なインディアンが存在していたのである。したがって，ニューメキシコではサンタ・フェなどのわずかの町と，カリフォルニアでは太平洋沿岸部の港町に居住地は限定されていたのである。ここでは，まずはカリフォルニアに限って話を進めてみたいと思う。

カリフォルニアに対する関心は1840年以前からすでに政府レベルでおこっていた。第6代米国大統領アダムズ（John Quincy Adams）や第7代大統領ジャクソン（Andrew Jackson）はカリフォルニアの獲得を実際に計画していた。後者は，とりわけアルタ・カリフォルニアを5百万ドルでメキシコから購入しようという具体的な計画まで立てていた。しかし，この関心が庶民のレベルで高まってくるのは1840年代まで待たなければならなかった。この地を訪れたダナ（Richard Henry Dana）が1840年に『平水夫としての2年間』（Two Years Before the Mast）という本を出版してカリフォルニアの魅力を語ったのを皮切りに，新聞紙上ではカリフォルニアには黄金が埋蔵していると報じられ，紙面をにぎわしたのであった。こうして，1846年にはカリフォルニアはおよそ2万5千人の人口をかかえるようになり，そのうち1万人が白人，5千人がキリスト教に改宗したインディ

アン，そして残りの1万人が純粋なインディアンであった。この白人人口は米国人の移民によってさらに増加したが，米墨戦争以前は，米国人とメキシコ人の対立というよりは，むしろカリフォルニア人（Californios）という共通のアイデンティティを強くもっていた人が多かったので，メキシコの土地でありながら，メキシコ市から遠く離れたカリフォルニアの住民たちは自治権の獲得を希望する場合が多かったのである[36]。

事実，1840年代に入ると，カリフォルニアの自治権承認をメキシコ政府に要求する反乱がいくつか起こっている。その最大の反政府勢力はモンテレイのボス的存在であったカストロ（José María Castro）であった。モンテレイは当時，唯一遠隔貿易をしていた港町で，彼はそこからの収益を独占していたのである。カリフォルニアの州都であったロサンジェルスにはメキシコ政府から任命されていた知事ピオ・ピコ（Pío Pico）がいたが，彼にはこれを打つ手立てがなかった。

他方，毎年350人もの新しい米国人入植者がカリフォルニアを訪れたが，とりわけ1832年にモンテレイに移住してきたニューイングランド出身の貿易商ラーキン（Thomas O. Larkin）は事業に成功しただけではなく，次第に土地の有力者へと成長していった。そして1843年には，モンテレイの米国領事に任命されたのであった。将来的にこのような米国移住者たちが米国政府によるカリフォルニアの併合を支持していくのである[37]。

だが，米国人の移住者が増えるにつれて，古くから住んでいるカリフォルニア人との対立，あるいは同じ米国人どうしの対立が問題になってきた。技師のフレモント（John C. Frémont）は上院議員のベントン（Thomas Hart Benton）の娘と結婚した関係で，彼から多大な恩恵を被ることになる。ベントンはオレゴンの獲得に関心があり，まずはそこへ多くの米国人移住者を送ることを考えた。そこで，ベントンの命令でフレモントはすでに1842年と1843年～44年の2回，探検隊を結成してオレゴンに向かった経験があったが，1845年6月までに3度目の探検隊を準備し，同年12月にはカリフォルニアのSutter's Fortに到着した。フレモントは一度オレゴンに向けて出発したが，途中で再びSutter's Fortに引き返し，当時カリフォルニア北部のソノマで活発であった独立派バジェホ（Manuel Vallejo）たちの「クマ共和国」（Bear Flag Republic）の運動に賛同していくのであった。このためにフレモントはわざわざ「カリフォルニア隊」（California Battalion）という軍隊を組織したのであった。やがて，彼は同派の中心的人物になっていくのだが，1846年7月には，カリフォルニアの征服をソノマで宣言したのである[38]。

これと同じ頃，ストックトン（Robert F. Stockton）提督はカリフォルニア征服のためにモンテレイにいた。彼は4つの船艦の指揮官であったが，ロサンジェルス占領のために

陸軍の援助を期待した。そこでフレモントに接近し，彼の「カリフォルニア隊」の参加を要請したのであった。

ところで，カリフォルニア人のなかには米国人に対して反撃することを考えていたものがいた。カストロとピコは米国の併合を中止させるために，何としてもストックトン＝フレモント勢力を撃退しなければならないと考えていたが，武器の調達などの問題があって不利な状況に置かれていた。そこで，ラーキンに相談をもちかけるが，ラーキンはカリフォルニアを米国の監視下で独立させることで妥協すべきであると忠告し，あくまでも中立の立場を貫いた。カストロとピコはラーキンの助言に従ってストックトンに平和的解決案を提示するが，これはストックトンによって頭から拒否されたのであった。こうしてカストロとピコは1846年８月10日に逃亡し，ストックトンとフレモントは13日にサン・ペドロに入港，さらにロサンジェルスまで進んでそこを占拠した。そして４日後，ストックトンは，カリフォルニアの併合を宣言したのである[39]。

しかし，必ずしもこのように，カリフォルニア人の抵抗もほとんどなく，カリフォルニアが米国人によって平和的に征服されたわけではなかった。その後，カリフォルニア人のフロレス大尉（José María Flores）の支配下にある約３百人はサンディエゴとサンタバルバラで蜂起した。またフロレス自身はカリフォルニア知事であったので，ロサンジェルスを拠点にその勢力を拡大しつつあった。この部下には先のカストロやピコが含まれていた。

そこで，ストックトンは早急にサンペドロに上陸してロサンジェルスを征服しようとしたが，一度目は敗退した。その後，作戦を変更し，サンディエゴの住民たちを自分たちの仲間に引き込み，フロレスたちに武器を輸出させないようにして，まずはフロレス勢力の孤立化をはかった。他方，ニューメキシコのサンタフェを無事に米国軍の手中におさめ，その後，さらにポーク大統領の命令でカリフォルニア征服をめざしてやってきたカーニー（Stephen W. Kearny）が1846年12月２日，カリフォルニアの Warner's Ranch に到着していた。そして彼はサンディエゴ，さらにロサンジェルスの攻略に加担した。こうして，カリフォルニアは1847年１月までには完全に米国の支配下に陥ったのであった[40]。

■ ニューメキシコ／チワワ（New Mexico/Chihuahua）

メキシコ領ヌエボメヒコの時代からサンタフェは交易の中心地としてさかえていたが，米墨両国の経済交流の面でこのことは極めて重要なことである。早くも1825年までには，ミズリーとサンタフェを結ぶサンタフェ街道（Santa Fe Trail）ができていて，ミズリー

の商人たちは金属，刃物，帽子，シャツ，サラサ，亜麻，ショール，ソックス，金，ビーバー毛皮などを売っていた。ニューメキシコにはスペインの植民地時代から入植者がいたので，1680年までに推定2,400人のスペイン人が居住していた。そして1800年までに，ニューメキシコの人口は約3万人になり，1825年までに4万人に増加した。この人口には約1万人のインディアンが含まれていた。彼らはナバホ，アパッチ，コマンチ，ユトなどの部族で，その多くは暴力的で，メキシコ人たちの入植地を頻繁に襲っていた[41]。

1846年5月13日の宣戦布告以後，ポーク大統領はマーシー（William Marcy）戦争大臣を通じて，カーニーにサンタフェ征服のための遠征隊の指揮を命じた。従来サンタフェ街道を総勢1,600人という大集団を編成して通ったことはなかった。途中，食糧や水の不足，および病気の問題があったが，6月30日に出発して7月末までにニューメキシコのBent's Fortに到着していた。全行程約千キロの長旅であった。

当時ニューメキシコ知事であったアルミホ（Manuel Armijo）は米国人の征服事業に反対し，一度は義勇軍を編成したが，最後まで積極的な抵抗を続けることはなかった[42]。カーニー軍はBent's Fortを出発し，400キロの道のりを進んで，ついにサンタフェに到着した。そして1846年8月19日，サンタフェは，アルミホ軍の抵抗もなく，ほぼ無条件でカーニー軍の支配下に入ったのである。こうしてカーニーがアルミホにかわってニューメキシコ知事に就任したのである[43]。

その後，カーニーはサンタ・フェ守備隊長にプライス（Sterling Price）大佐を任命し，カーニー自身はすでに述べたようにカリフォルニア遠征に出かけた。また同時に，カーニーは部下のドニファン（Alexander Doniphan）大佐にチワワ遠征を命じた。その一帯にはすでにウール（John E. Wool）将軍が布陣していたので，最終的には同軍に合流するのが目的であった。ドニファンは，途中広大な砂漠をいくつも通り抜けなければならないことや，アパッチなどのインディアンによる攻撃を懸念したが，1846年10月に義勇兵924人を率いてサンタフェを出発した。そして，同年12月25日にはエルパソの北48キロのところに来ていた。その後エルパソは占領された。さらにチワワに向けて進んだが，途中のサクラメントの戦い（1847年2月28日）でメキシコのコンデ（García Conde）軍を破った。こうして1847年3月1日にチワワを完全に征服した。その後，ドニファン軍はさらに南下し，義勇兵の任期の切れる1847年5月末まで前進し続けた[44]。

4. 米国の膨張主義政策（III）——メキシコ市征服をめざして——

■ ベラクルス（Veracruz）

テイラー軍からその半分の兵力を自らの軍隊に加えたスコットは，メキシコ湾に沿って海路と陸路に分れて南下した。さらにタンピコの南にあるロボス島で，米国からやってきた新しい義勇兵がこれに加わった。こうして，3月初めにはスコットはベラクルス沖に到着していた。

すでに1845年秋以来，コンナー提督は，メキシコ湾岸の幾つかの港を封鎖してきたが，ベラクルス沖をのぞいてそのほとんどがメキシコ軍の反撃を受けたために成功しなかった。その後，コンナー艦隊は1846年11月にタンピコ港を封鎖し占領している。スコットがベラクルスに来たのとほぼ同じ頃，コンナー提督からペリー（Matthew C. Perry）提督にその任務は引き継がれた。後者は，1853年にわが国に渡来し江戸幕府に開国をせまった，まさに「黒船」のペリー提督であった。こうして，ベラクルスの戦いは，スコットとペリーが協力する形で開始された。

1847年3月9日，スコットはベラクルスから3キロ離れたコジャード海岸に上陸した。そこからベラクルスをはさんで8キロほど離れた地点とを結ぶ直線上に米国軍を配置することで，隣接地域との連絡を遮断し，ベラクルスとその向かいの海上にあるサンウレア要塞を孤立させた。そして，次第に米国軍は海と陸の両方から両砦を包囲していった。22日，スコットはメキシコ側のモラレス（Juan Morales）少佐に無条件降伏を要求したが，モラレスはこれを退けた。ベラクルスの町もサンウレア要塞もともに厚い石の城壁で囲まれていたので，米国軍は大砲による攻撃をしなければならなかった。しかし，スコット軍の砲兵中隊が何度もその城壁をこわそうとするが，全く歯ごたえがなかった。そこで，23日，スコットはペリーに，より大きい14.5キロの砲弾を打たせた。すると25日，ついに砲弾は城壁を壊し，直径約15メートルの大きな穴をあけることに成功したのである。

他方，砲弾によって城壁内の建物や人間が無差別に攻撃されたために，多くの一般住民の人命をも奪うことになった。26日，モラレスは代理人のランデロ（José Juan Landero）を立てて降伏を申し出たので，翌日，スコットはこれを受け入れた[45]。この戦いで，米国軍は死者15人，負傷者55人であったのに対し，メキシコ側の犠牲者はその何十倍も出た。一説には，メキシコ軍死者350人，市民の死者400人におよんだといわれている[46]。

■**セロ・ゴルド**（Cerro Gordo）

ベラクルスを占領したスコット軍は1週間ほどでメキシコ市に向けて出発した。メキシコ市は標高2,300メートルの盆地にあるので，山越えだけでも相当の苦労が予想された。しかも道中でサンタ・アナがスコット軍を待ち伏せしている可能性があったので，4月15日，スコットはリー（Robert E. Lee）隊長とボーリガード（Pierre G. T. Beauregard）中尉に偵察を命じた。そして彼らが収集してきた情報をもとに，作戦を立てた。メキシコ軍の前線は，街道を一望できる3つの丘に分散し，サンタ・アナはそれよりもさらに街道を進んだところにあるセロ・ゴルドを呼ばれる高い丘のふもとに野営していた。セロ・ゴルドの山頂にはすでにメキシコ側の砲兵中隊が待機していた。

17日，セロ・ゴルドのすぐ後方にラ・アタラヤという，セロ・ゴルドにくらべると小さい丘があったが，米国軍はここを占拠した。そして，メキシコ軍を攻撃するために，ラ・アタラヤの頂上まで，3トンもある重大砲を運んだのである。一方，メキシコ軍のキャンプの後方に通じる抜け道を事前に発見していた米国軍はトィッグス（David E. Twiggs）将軍を中心に後方からの攻撃の準備にかかった。後方の戦陣の不備はすでにメキシコ軍上官のあいだで指摘されていたが，サンタ・アナはこれを無視したという[47]。

18日，米国軍は各方面からメキシコ軍を攻撃した結果，メキシコ軍に多数の死傷者が出て，サンタ・アナや上官などはデル・プラン河沿いに逃げた。この戦いで，米国軍（約8,500人）は，死者63人，負傷者368人[48]に対し，メキシコ軍（約12,000人）は，死者26人，負傷者122人で，捕虜は約3,205人におよんだ[49]。

サンタ・アナがセロ・ゴルドから退散し，メキシコ軍に大きな打撃を与えたことを知ったスコットは，米国軍の勝利を確信していた。さらにスコットはハラパ，ペロテなどの街道沿いの町を占拠し，5月末までにプエブラに到着した。道中メキシコ軍はほぼ皆無であったので，大半のメキシコ人住民たちは無条件で降伏せざるをえなかった。以降，3ヶ月ものあいだスコットはプエブラに滞在しつづけることになる。

スコット軍はプエブラを占拠したが，住民との関係を円滑なものにするために，決して威圧的な征服は行われなかった。当時のプエブラの人口は約6万人で，米国軍はわずか6千人であった。セロ・ゴルドの戦いのあと，8千人ほどいた米兵のうち，下痢や黄熱病で約2千人が療養生活に入り，また多くの義勇兵が任期を終えて米国へ帰国したために，米国軍の人員は減っていた。

他方，ベラクルスとプエブラのあいだはベラクルスからの救援物資の供給経路で，その

重要な拠点として，ハラパやペロテなども米国軍が占拠していた。ところが，各拠点のあいだでは，米国軍の支配に反対するメキシコ人たちによるゲリラ行為が頻繁に起こり，遂に米国軍はその経路の維持を断念した。6月4日，スコットはベラクルスにわずかな兵士を残し，これ以外をすべてプエブラに集結させた。スコットはワシントンに向けて援軍と救援物資を要求したが，前者についてはとりわけ時間を要した。ポークとマーシーはスコットを支持していなかったために，その対応はさらに遅れたといわれている。

彼が要求していたものには，薬，衣服，塩，弾薬，蹄鉄，コーヒー，ブランケット，ナップサック，パン，ベーコン，砂糖，葉巻，ブランデーなどがあったが，結局，大半のものはプエブラのメキシコ人から購入した(50)。

他方，ポークはスコットの進行があまりに遅いことにいらだっていた。米国内では，戦争の長期化にともなって，死傷者の増加の知らせが国民に戦争の早期解決を期待させた。その一方で，戦争による損害の代償として戦争の遂行の強化と領土獲得の要求が米国内で高まっていた。1846年12月の年次教書で，ポークは戦争の正当性を主張し，戦争は領土の征服を目的として戦われてきたものではなく，戦争は戦費と代償のための賠償をもとめ，名誉ある平和を獲得するためのものであると述べた。代償としての領土獲得という点で国民の多くの支持を集めていたが，反面，その領域を奴隷州あるいは自由州にするかどうかで国がまさに二分するほど分裂の危機をむかえていた(51)。ポークはまずは早期の講和条約締結をめざし，そのために戦争の遂行は優先して強化されるべきであるとした。そこで，ポークは平和的解決がいつでも開始できるように，交渉人をワシントンから送ったのである。

1847年5月6日，その交渉人であるトリスト（Nicholas P. Trist）がベラクルスに到着したが，この時すでにスコットはハラパにいた。トリストはスコットに面会するのを待ったが，それが実現しなかったので，まずは大統領から渡されていた要求内容を文書でスコットに送付した。その要求内容とは，①現メキシコ領のアルタ・カリフォルニア，バハ・カリフォルニア，ヌエボ・メヒコ，テキサスの米国への売却，②米国政府による①に対する3千万ドルの賠償金の支払い，③両国の境界をリオ・グランデとする，という3点をメキシコ側に認めさせることであった。スコットはこの提案自体に反対していたわけではなく，ポークがまるで自分のことを無視しているかのごとく，トリストを派遣してきたことに対して腹を立てていた。そこで，6週間のあいだ，両者の面会が実現することはなかった。したがって，ポークの伝達を早急にメキシコ政府に伝えるために，トリストは旧友のイギリス公使バンクヘッド（Charles Bankhead）に，サンタ・アナへの伝達を直接

依頼した。6月末，トリストはスコットに和解の手紙を送り，両者がはじめて面会する機会がもたれた[52]。

他方，敗北が続き，サンタ・アナに対するメキシコ国会での支持率が低下していった。しかもサンタ・アナが個人的に米国側と交渉することを禁止する法令が成立していた。7月初め，サンタ・アナはトリストとスコットに対し，講和条約を受け入れるためには，国会でのサンタ・アナへの支持率を上げる必要があり，このための資金として百万ドルを要求してきた。そこで，米国側は手付金として1万ドルをサンタ・アナに支払ったが，結局は和平交渉にはもっていけなかった。こうして，スコットは怒りと興奮がこみ上げてくるなか，メキシコ市占領をめざし，早急にプエブラを後にした[53]。

8月に入り，米国からの追加の2千人の兵士がベラクルスに到着し，同月7日，スコット軍は総勢約1万人でプエブラを出発した。3日後，同軍はポポカテペル山のふもとに到着した。標高3,200メートル以上の高さからはるか下方にメキシコ市がみえたが，その景色は絶景であった。メキシコの都は周りを大きな湖で囲まれ，まるで浮島のように，その真中に存在していた。太陽の光で湖の水は金色の輝きを放っていたが，これはさぞかし見るものを魅了させたことであろう。スコット自身，この時，米軍の勝利を確信し，新たにその決意をしたのだが，かつてスペイン人征服者（コンキスタドール）のコルテスもこの場所に立ってアステカの都テノティティトラン（メキシコ市の前身）を同じような気持ちで見つめていたかもしれない[54]。

■ コントレラス（Contreras）とチュルブスコ（Churubusco）

他方，サンタ・アナは約7千人の兵力[45]をエル・ペニョンに配置した。メキシコ市に向かう唯一の街道を一面に見渡すことのできる位置に兵隊を待機させて，スコット軍があらわれるのを待っていた。ところが，スコットはエル・ペニョンを通るルートを故意に避けて，メキシコ市南部に位置するチャルコ湖およびソチミルコ湖を通る南ルートを選んだのである。これはサンタ・アナにとっては誤算であった。やがてスコット軍がやってきたことに気づいた南ルート付近の住人たちは自宅のあらゆる窓をしめ，家のなかに隠れるか，または安全な場所をもとめて町を離れた。遠くからはメキシコ軍のラッパの音が聞こえてきた。サンタ・アナはやがてスコット軍が南ルートを取ったことに気づき，同軍が南ルートから北上してくることを予想し，北に通じる道路を封鎖した。

サン・アグスティンまでやってきたスコット軍はそこで北上するのを躊躇していた。な

ぜなら，すでに1.6キロ北のサン・アントニオと，そこからさらに3.2キロ北のチュルブスコにメキシコ軍が陣を構えていたからである。そこで作戦を変更して，サン・アグスティンから北上せずに，さらに西に向かって別ルートで北上することにした。だが，西方にはペドレガルと呼ばれる，8キロ四方にまたがる巨大な溶岩があり，その表面はまるで鋭利な刃物のように先がとがっており，人間や馬もその上を通ることは危険であった。しかし，スコットの命令で偵察していたリーは，ペドレガルのなかを通り抜ける1本の抜け道を遂に発見したのであった。

そこで，この道を進んでいくと，コントレラスでメキシコのバレンシア（Gabriel Valencia）軍を発見した。リーはサン・アグスティンにもどり，スコットに援軍を要請した。そして，19日夜，バレンシア軍を包囲した。翌日，わずか17分で，バレンシア軍（総勢約7,000人）を倒し，メキシコ側に多くの犠牲者がでた。死者700人，負傷者813人（うち4人は将軍）であったといわれている。バレンシアはうまく逃げ失せた[56]。

やがてスコット軍はチュルブスコにやってきた。同軍は二手に分かれ，一方はトラルパンを通ってチュルブスコ橋にいるメキシコ軍を攻撃，もう一方は，コヨアカンを通ってチュルブスコの修道院を狙った[57]。メキシコ軍の多くはこの修道院に立てこもっていた。このなかには，職人，石屋，法律家などの職業人で構成された国民衛兵（Guardia Nacional）が参加していた。また元米国軍でメキシコ軍の捕虜になっていた聖パトリック隊（San Patricios）もメキシコの正規軍として加わり，米国軍と戦った[58]。チュルブスコの戦いはわずか3時間ほどで終ったが，両軍ともに多くの犠牲者を生んだ。米国軍は死者1,053人（即死139人），メキシコ軍は死傷者約4,000人，捕虜3,000人（8人の将軍を含む）であった[59]。

この時点でスコットはさらにメキシコ市の中心をめざして，メキシコ軍を撃滅させ完全制覇を企てることも可能であったが，彼はこれを中断した。スコットは軍を前進させるかわりに，和平交渉を開始して早急に平和的解決を実現することを希望した。これにサンタ・アナは同意し，8月27日から和平の協議が始められた。米国側の代表はトリスト，メキシコ側はエレラ（José Joaquín de Herrera）のほか3名であった。開始当初から協議は難航したが，9月1日から2日にかけての協議で，トリストは交渉の末に大きく譲歩する提案を出した。その妥協案とは，①ヌエセス河境界，②3000万ドルの賠償金の支払い，であった[60]。

ところが，メキシコ側において，この提案に対する合意がえられなかったために，交渉は再び中断されたのであった。なぜなら，サンタ・アナや和平派の軍人たちは妥協に異議

を申し立てなかったが，主戦派であるパチェコ（Francisco Pacheco）外相やトルネル・メキシコ連邦区知事などが戦争の続行を強く主張していたからであった。この知らせを受けたスコットは憤慨し，即座に2週間の休戦条約を破棄してメキシコ市に向けて軍をすすめた。スコットは戦争の長期化にともなって，次第に平和的解決を期待していたが，これがメキシコ側に受け入れられない以上，サンタ・アナを逮捕し処刑するまで，つまりメキシコ軍の生きの根をつむまで，ひたすら前進するのみであると考えた。他方，サンタ・アナは，米国軍による教会への襲撃，女性への暴行などの非人道的な行為を非難し，好戦的姿勢をしめした[61]。

■ **モリノ・デル・レイ**（Molino del Rey）

9月6日に和平協議が決裂し，戦争が再開された。チャプルテペック城の西1キロに位置するモリノ・デル・レイはもともと製粉所であったが，当時は火薬や武器（とりわけ大砲）の製造工場として使われており，その回りは石の砦で囲まれていた。また，その0.6キロ北西に離れたところにカサ・マタと呼ばれる弾薬庫があった。9月8日，スコットはワース（William J. Worth）将軍に，モリノ・デル・レイとカサ・マタへの攻撃を命じた。そこで，ワースはモリノ・デル・レイの正面と右手，およびカサ・マタの3手に総勢3,500人の軍を分けて配置した。モリノ・デル・レイの正面には歩兵隊の突撃隊 storming party（ライト少佐 George Wright 指揮下の選抜500人で構成，「決死隊」forlorn hope と呼ばれた）と騎歩兵ライフル銃隊 voltigeurs，およびデュンカン（Jemes Duncan）の大砲隊を，右手にはヒュージャー（Benjamin Huger）中佐の砲兵隊を含むガーランド（John Garland）隊を，カサ・マタ攻撃にはクラーク（William Clark）隊（マッキントッシュ大佐 J. S. McIntosh を含む）を，さらにカッドワレイダー（George Cadwalader）隊（ピロー Gideon J. Pillow の分隊）およびサンナー（E. V. Sumner）少佐の270人の騎銃兵はカサ・マタの西方からの攻撃に対応すべく配置された。

他方，サンタ・アナはこれに対して，総勢1万人を配置した。モリノ・デル・レイの正面にレオン（Antonio León）軍を，モリノ・デル・レイに向って右手にランヘル（Joaguín Rangel）軍を，カサ・マタにはペレス（Francisco Pérez）軍を，そして西方のロス・モラレスにアルバレス（Juan Alvarez）指揮下の4千人から成る騎兵隊（フベラ J. Juverra 隊，アンドラーデ M. Andrade 隊）をそれぞれ配置した。しかし，モリノ・デル・レイの防衛に関しては十分な軍の配置がなされなかった。

戦いは米国側から始められた。ライト指揮下の「突撃隊」とヒュージャーの鉄砲隊がま

ずは攻撃を開始した。この「突撃隊」はさまざまな分隊からの寄せ集めで，チームワークはよくなかったという指摘が後世の研究者によってなされている。その結果，メキシコ側の歩兵やマスケット銃隊によって，ライトを含め，14人の士官のうち11人までが殺された。ガーランドの騎兵隊とヒュージャーの砲兵隊の後援がなければ，さらに犠牲者は増えていたことであろう。最終的にガーランド隊がモリノ・デル・レイを攻略した[62]。

一方，モリノ・デル・レイ陥落後は，戦いはカサ・マタに集中した。デュンカンとヒュージャーの両隊もカサ・マタに急行した。クラークの第2連隊のリーダーであるマッキントッシュは，ワースからカサ・マタへの襲撃を命じられた。カサ・マタもまた石の砦で囲まれていたが，そこを攻め立てた。その頃，メキシコ側のアルバレス軍がカサ・マタの危機を救おうとして，西方から近づいてきたが，これにいち早く気づいたデュンカンおよびサンナー両軍が阻止し，同軍をカサ・マタに近づけなかった。カサ・マタは制圧され，中から出てくる負傷兵を含むメキシコ兵の多くは虐殺された[63]。

こうしてモリノ・デル・レイとカサ・マタの戦いによって，メキシコ軍は死傷者約2千人，捕虜700人，脱走者2千人であった[64]。米国軍は死者116人（スミス E. Kirby Smith 大佐を含む），負傷者671人（マッキントッシュ大佐など）であった。わずか2時間の戦いで23%にあたる約800人が犠牲になったことは，テイラー軍のモンテレイでの惨劇にまさる戦いであったことを意味する[65]。

■チャプルテペック（Chapultepec）

米国人のメキシコに対するイメージの一つに，「モンテズマの館」（The Halls of the Montezumas）がある[66]。モンテズマとはアステカ帝国の国王で，スペイン語では「モクテスマ」という。スペイン人征服者コルテスがアステカの都テノティティトランを征服しに初めてやってきたとき，モクテスマの宮殿は，黄金で装飾されていて，この光沢が放つ輝きは見るものを虜にしたという伝説がある。米国人の脳裏にはこのイメージとチャプルペテック城が重なっていたのである[67]。チャプルテペック城は，まわりを森で囲まれた小高い丘の上にあり，スペインの統治下では，ここは副王の居住地として，1844年以降は士官学校として使用されていた。

9月11日夜，スコットと数人の将校の間でチャプルテペック城を攻撃すべきか否かについて協議をすすめていた。意見は二分していたが，最終的にスコットが城の攻撃を決断した。だがスコットはモリノ・デル・レイと同じ繰り返しを望んでおらず，これ以上の犠牲者が出ることにとまどいの気持ちもあった。

9月12日早朝5時，チャプルテペック城の城壁や屋根をめがけて攻撃が開始された。当時，場内にはブラボ将軍をはじめ，832人（80人の士官学校生を含む）がいた。ブラボ将軍自身は傷を負わなかったが，午前中だけでも相当の死傷者が廊下にあふれていた。廊下には多くの死体がころがり，負傷者の泣き叫ぶ声がした。しかし，治療薬がほぼ皆無であったために，応急処置すらもなされず，負傷者の治療は見送られていた。このような非常事態でも平然とブラボは別室で朝食をとっていたが，そこへサンタ・アナがあらわれた。ブラボ将軍はサンタ・アナに援軍を早急に配置するように要求したが，サンタ・アナからは否定的な回答しか得られなかった。しかしながら，チャプルテペック城から撤退することは認められず，ブラボは途方に暮れた。城内のメキシコ兵の運命がこの先どのようになるかは容易に予想できていたのである。実際，サンタ・アナやブラボが城から撤退することを決断しなかったために，多くの若いメキシコ兵が徒死にすることになるのである。ここである有名なエピソードがあるので紹介しておこう。

メキシコ軍のホアン・カノ（Juan Cano）中尉は，チャプルテペック城に立てこもるメキシコ軍の運命をすでに予期し覚悟ができていた。ところで，ホアンの弟のロレンソも市民兵としてこのチャプルテペック城に立てこもっていた。そこで兄のホアンは弟のことを思いやり，せめて弟の命だけは救おうとして，ロレンソに，至急自分たちの叔父のところへ赴き，救援物資を調達してくるように命じる。当然これは弟を城外へ出させるための口実であった。その夜，ロレンソは密かに城を後にしたが，ホアンが叔父宛てに書いた手紙には次のような内容が書かれていたのである。

「おそらく明日，メキシコ兵たちは命を失うことになるだろうと思う。私は，年老いた両親に，二人の息子が同時に死んだという知らせを受けとるという，耐えがたい苦しみを与えたくないので，どうか叔父さんにはロレンソがここにもどるのを引き止めてほしい。もしロレンソがチャプルテペックにとどまれば，彼も私もともに死ぬであろうから」[68]

他方，米国軍のなかにも不安な気持ちが横切っていた。ワースは「われわれは負けるかもしれない」[69]と言い，スコットも「私は過ちをおかした」とつい側近にもらしていた[70]。このように，両軍ともに不安な気持ちを隠しきれなかったが，覚悟してチャプルテペックの戦いに正々堂々と挑もうとしていた。

9月13日，雲一つない澄み切った青空が広がり，天候は良好であった。戦いの日の朝とは思えないほどの平和でのどかな風景であった。チャプルテペックの北と東は厳重な警備がひかれていたので，米国軍は西と南から城内に侵入することを考えた。城内にはメキシコ兵が260人ほどいた。さらに城の防衛に約600人体制でのぞんだ。そのうち400人は

狙撃隊の聖ブラス隊（San Bras Batalion）で，彼らは丘のふもとの森で待機していた。他方，米国軍は，西側からの攻撃がパース（Franklin Pierce）軍に，南側がクィットマン（John A. Quitman）軍に命じられた。後者にはトィッグス軍から選抜された265人で構成されるはしご隊 scaling party が加えられた。

戦闘は明け方からチャプルテペック城下の森で開始され，朝7時半頃まで続いたが，その後30分ほどは銃口がチャプルテペックの城壁に集中して向けられた。やがて，西側からパースの大砲隊がはしごをかけて場内へ入った。だが，メキシコ軍との小競り合いで，米国側にかなりの犠牲者がでた。その頃，米国側の援軍が城壁の外まで来ていたが，はしごがなかったためにその場でしばらく立ち往生していた。やがてはしごが届き，50人ずつ場内へ入っていった[71]。

9時半までにチャプルテペック城は米国軍によって占拠された。わずか2時間の戦いで城は陥落してしまった。ジョンズトン（Joseph E. Johnston）の voltigeurs 分隊によって東の城壁の上に米国国旗がかかげられた。モリノ・デル・レイの仇討ちとして無造作に多くのメキシコ兵が殺された。ブラボ将軍や何人かの上官は侵入してきた米国軍をまえに降伏し，また脱走兵も多数発生した。だが一方で，若い士官候補生たちのなかには命を惜しまず最後の最後まで自分に与えられた任務を遂行し続けたものがいた。今日，チャプルテペック公園の正面入口から入ると，入口から奥に続く通路の先に高々と聳え立っている6本の白亜の塔が視界に入ってくるはずである。これは，その時に命を失った士官学校の学生6人を偲んで建設されたモニュメントである。彼らは「英雄少年」（Niños Heroes）と呼ばれ，命をなげうってまで国のために貢献した若者の物語は，メキシコ史の美談とも悲劇ともいわれ，語りつがれてきた。このなかのホアン・エスクティア（Juan Escutia）はメキシコ国旗を両手に抱いて投身したといわれている[72]。

ところで，米国軍によって死に至ったものは少年兵ばかりではなかった。これと同じ頃，チャプルテペックが遠くに見える小高い丘で死刑が執行されようとしていた。死刑を宣告されたものは，チュルブスコの戦いで捕虜になった元米国脱走兵でメキシコ軍に正式に登録されていた聖パトリック隊の30人であった。彼らはチャプルテペックが占拠された時点で刑が執行される手順になっていた。そしてその合図は，城が米国軍の手中に入ったときにかかげられる米国国旗であった。聖パトリック隊の隊員たちの首には死刑台の上からつるされたロープがかけられ，彼らはラバにまたがったまま死刑執行の瞬間を待っていた。平均年齢が20代半ばの若者たちがどのような気持ちで，遠くに見えるチャプルテペック城をながめていたのであろうか[73]。この朝の戦いでメキシコ軍に1,800人の死者が出た[74]。

他方，米国軍は7,180人のうち，死者1,795人であった[75]。

■ メキシコ陥落の日

スコットはその勢いで同日中にメキシコ市に入ることを部下に命じた。サンタ・アナの首をとるまで，戦いは続けられなければならなかったからである。だが，9月13日夜，急遽，サンタ・アナは最高権力者の地位を自ら放棄し，メキシコ市から撤退することを軍および政府関係者に通達した。こうして，事実上，メキシコは米国に降伏することとなった。これと同時にメキシコ市は無政府状態となったのである。

1847年9月14日，サンタ・アナが撤退したあとのメキシコ市には，長期にわたる戦いに遂に敗れ，その失望による空虚感が町全体に漂っていた。午前中には早くもスコットをはじめとする米国軍の行進が町じゅうで見られた。だが，メキシコ民衆の対応は一様ではなかった。家の玄関や窓を締め切って暗い家に閉じこもっているものもいれば，家の屋根に登り，街中の様子を見ているものもいた。そうかと思えば，米国軍に対して屋根の上から石やレンガを投げる民衆や，メキシコ国旗を手に握り，民衆とともに「メキシコ万歳！ヤンキー死ね！」と大きな声で叫びながら，馬に乗って最後の抵抗を試みていたカトリック修道士もいた。だが，いずれの対抗的な動きも昼すぎまでに完全に鎮圧され，スコットは悠悠と勝利の行進をメキシコ広場（現在のソカロ）あたりでしていた。長い間の念願であったメキシコ征服がここに達成され，遂に肩の荷が下りた。スコットは感極まる気持ちをおさえることができなかった[76]。

結びにかえて——和平への道

さて，スコットのメキシコ市支配は即座に戦争の終結には結びつかなかった。サンタ・アナが辞任したあと，最高裁判所長官ペーニャ・イ・ペーニャ（Manuel Peña y Peña）が暫定大統領に就任したが，政情の不安は一向に解決されなかった。10月にトリストはポークによってリコールされていたが，最後の和平交渉の実現を画策するために，ポークの命令を無視しメキシコに残っていた。この背後にはスコットの助言があった。彼は，できるだけ早く和平を実現しなければ，メキシコとの戦争はさらに延期され，それはひいては米国軍の分裂の原因になるであろうと懸念していたからである。事実，スコット以外の軍幹部たちのなかには，米国軍が永久にメキシコを征服し続け植民地にすべきであるという見解があり，これらとの将来的対立が予期されたからである[77]。一方，スコットにとっ

て救いであったのは，ペーニャ・イ・ペーニャをはじめとするメキシコ穏健派が概して和平の確立をいそいでいたことであった。両国代表は1848年１月から協議に入った。メキシコ側でも和平条約に反対し，戦争の続行を主張する党派が存在したが，最終的に議会で和平条約は可決された。米国では戦争の代償としての賠償金をメキシコに要求し，より広大なメキシコ領域の獲得を支持する動きが高まる一方で，戦争の長期化によって，これまで幾度もメキシコに拒否されてきた和平を早急に確立することを期待する動きが活発になっていた。ポークの支持政党である民主党は獲得領域に奴隷制を導入するか否かで，分裂の危機に立たされており，これを回避するためにも平和的解決を支持し始めたのであった。こうして，米国議会で和平条約の締結が承認され，1848年２月，両国代表はメキシコ市郊外のグアダルーペ・イダルゴ村で講和条約に調印した。このように，和平交渉は難航し時間を費やしたが，１年10ヶ月ぶりに平和がもたらされたのである。この大きな背景には，戦争の長期化と多くの犠牲者が生まれたことによって，次第に多くの人々が出口の見えない戦争の続行に心身ともに疲労し，心から平和とやすらぎをもとめるようになっていったことが考えられる。この人間の自然な心情を実行に移す「勇気」と，相手に対する「和」の心が何よりも和平には大切である。とかく自己の利潤が優先されがちな人間社会において，人は通常，対話を通じての他者への譲歩が相互の調和を高め，ひいては自己の幸福に結びつくということを忘れがちであるが，まさに，このことは，戦争という惨事によって，心底から自己が傷いてはじめて身にしみて理解されうる歴史上の教訓なのである。

（1） リオグランデのこと。メキシコ人はリオ・ブラボ，リオ・デル・ノルテと称する。

（2） David M. Pletcher, *The Diplomacy of Annexation: Texas, Oregon, and The Mexican War* (Columbia: University of Missouri Press, 1973), pp.385-386.

（3） 同様に，ブッシュ大統領は９月11日の同時多発テロ事件を「新しい戦争」の始まりという曖昧な表現を用いて位置付けているが，報復を目的とする戦争以外に別の大きな戦争目的があるかのような発言として受け取ることもできる。しかし，現段階においてその真相は完全には明かされないのである。米墨戦争における歴史の連続性と非連続性については，拙稿「(書評論文) 山岸義夫『アメリカ膨張主義の展開――マニフェスト・デスティニーと大陸帝国』」(『北陸史学』第44号，1995年)，pp.87-92で少し触れた。

（4） アフガン戦争に参加している米軍の意識の変化については，例えば，James Dao, "For G.I.'s in Afghanistan, War Is Hellishly Boring," *The New York Times* (2002年５月31日付) in http://query.nytimes.com/. 反戦運動の実態についても新聞・インターネット上で知ることができる。

（5） George Lockhart Rives, *The United States and Mexico, 1821-1848: A History of the Relations between the Two Countries from the Independence of Mexico to the Close of the War with the United States, II* (2vols., New York: Kraus Reprint Co., 1969 [1913]), pp.141-142. メキシコ議会で宣戦布告が承認されたのは７月２日である。

(6) このような見解は，例えば，山岸義夫『アメリカ膨張主義の展開——マニフェスト・デスティニーと大陸帝国』(勁草書房，1995年)，p.113；Glenn W. Price, *Origins of the War with Mexico: The Polk-Stockton Intrigue* (Austin: University of Texas, 1967).

(7) John D. P. Fuller, *The Movement for the Acquisition of All Mexico, 1846-1848* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1936).

(8) John S. D. Eisenhower, *So Far From God: The U.S. War with Mexico, 1846-1848* (New York: Anchor Book, 1989), pp.195-204. これと逆の立場にあるものとして，Angela Moyano Pahissa, *El comercio de Santa Fe y la guerra del 47* (México: Secretaría de Educación Pública, 1976), pp.169-174.

(9) 山岸前掲書，pp.33-60.

(10) William Ransom Hogan, *The Texas Republic: A Social and Economic History* (Austin: The University of Texas Press, 1969), p.10.

(11) 詳細は，拙稿「テキサス併合とメキシコ——アメリカの膨張的発展に対するエレラの対応——」(『スペイン史研究』第7号，1991年)，pp.20-22.

(12) Norman A. Graebner, *Empire on the Pacific: A Study in America Continental Expansion* (New York: Ronald Press, 1955), p.224-228.

(13) イメージと偏見を扱っているものは，Gene M. Brack, *Mexico Views Manifest Destiny, 1821-1846: An Essay on the Origin of the Mexican War* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1975).

(14) このあたりの詳細は，拙稿「アメリカ膨張主義とメキシコの対応——米墨戦争（1846年～1848年）の性格をめぐる論争を中心に——」(『ラテンアメリカ研究年報』No.18，1998年)，pp.49-76.

(15) Leopoldo Martínez C., *La intervención norteamericana en México, 1846-1848: Historia político-militar de la pérdida de gran parte del territorio mexicano* (México: Panorama Editorial, S.A., 1989), pp.79-80.

(16) Carol Christensen and Thomas Christensen, *The U.S-Mexican War* (San Francisco: Bay Books, 1998), p.64；Ramón Alcaraz, et., *Apuntes para la historia de la guerra entre México y Estados Unidos* (México: Consejo Nacional para la cultura y las Artes, 1991), p.82.

(17) Christensen, *op.cit.*, p.64.

(18) Martínez, *op.cit.*, p.84.

(19) *Ibid.*, pp.92-93.

(20) *Ibid.*, pp.93-94.

(21) Christensen, *op.cit.*, p.67.

(22) Martínez, *op.cit.*, p.97.

(23) *Ibid.*, pp.98, 100.

(24) Christensen, *op.cit.*, pp.131-132.

(25) Martínez, *op.cit.*, p.113.

(26) キューバに亡命していたサンタアナが帰国を許された経緯については，Pedro Santoni, *Mexicans at Arms: Puro Federalists and the Politics of War, 1845-1848* (Fort Worth: Texas Christian University Press, 1996), pp.120-125.

(27) Christensen, *op.cit.*, pp.145-146.

(28) *Ibid.*, pp.152-153；Ramón Alcaraz, *op.cit.*, pp.131-141.

(29) 山岸前掲書，pp.228-229.

(30) Christensen, *op.cit.*, pp.140-141.
(31) Antonio López de Santa Anna, *The Eagle: The Autobiography of Santa Anna* (Austin: State House Press, 1988), p.93.
(32) Christensen, *op.cit.*, p.159.
(33) *Ibid.*, pp.160-161.
(34) *Ibid.*, p.160.
(35) Eisenhower, *op.cit.*, p.199.
(36) *Ibid.*, pp.200-201.
(37) *Ibid.*, pp.201, 203.
(38) *Ibid.*, pp. 210-211, 213.
(39) *Ibid.*, p.216.
(40) *Ibid.*, pp.217-219, 230. ストックトンはカリフォルニア知事にフレモントを指名したが，ポーク大統領はカーニーを同職に任命する，という一連の騒動があった。
(41) *Ibid.*, pp.196-197.
(42) Martínez, *op.cit.*, p.134.
(43) Eisenhower, *op.cit.*, pp.208-210.
(44) *Ibid.*, pp.232, 241-247.
(45) 死者はメキシコ軍が80人，市民が150人という数値もあるが，正確な数値は把握されていない。筆者が目を通したいずれの研究書や資料にも死傷者数については触れられていない。Christensen, *op.cit.*, p.172.
(46) Martínez, *op.cit.*, p.154.
(47) Christensen, *op.cit.*, p.180.
(48) この数値は個々の研究書において一様ではなく，本文の数値は最新の研究書によるものである。Roa Barcena は米軍の負傷者を145人としており，368人という数値は少し多すぎると思うが，正確なところはわからない。Edward H. Moseley and Paul C. Clark, Jr., *Historical Dictionary of the United States-Mexican War* (Lanham: The Scarecrow Press, 1997), p.75 ; José María Roa Barcena, *Recuerdo de la invasión norteamericana,* 1846-1848, *II* (3vols., México, Editorial Porrúa, S.A., 1971 [1883]), pp.30, 34.
(49) Moseley and Clark, *op,cit.*, p.70.
(50) Christensen, *op.cit.*, pp.186-187.
(51) 山岸前掲書，pp.234-235.
(52) Christensen, *op.cit.*, p.193.
(53) *Ibid.*, p.194.
(54) Robert W. Johannsen, *To The Halls of The Montezumas: The Mexican War in the American Imagination* (New York: Oxford University Press, 1985), p.155.
(55) このなかには，戦争経験がほぼ皆無の４つの国民軍が含まれていた。
(56) Christensen, *op.cit.*, pp.199-202.
(57) Martínez, p.175.
(58) アイルランド人以外に，フィリピン，イタリア，プロシアなどの出身の兵士が含まれていた。Robert R. Miller, *Shamrock and Sword: The Saint Patrick's Battalion in the U.S. -Mexican War* (Norman: University of Oklahoma Press, 1989), pp.175, 188-192.
(59) Christensen, *op.cit.*, p.203 ; Eisenhower, *op.cit.*, p.327.

(60) これにはスコットの同意があった。
(61) Pletcher, *op.cit.*, pp.518-521.
(62) Eisenhower, *op.cit.*, p.335.
(63) *Ibid.*, p.336.
(64) Justin H. Smith, *The War with Mexico, II* (2vols., Gloucester: Peter Smith, 1963 [1919]), p.147.
(65) Moseley and Clark, *op.cit.*, p.173.
(66) テイラー軍の勝利の知らせはたちまち米国に広がり，ニューヨークの戦争支持者のなかから，「いざ，モンテズマの館へ」「メキシコか死か」というスローガンが生まれた。Johannsen, *op.cit.*, p.10.
(67) *Ibid.*, p.83.
(68) Christensen, *op.cit.*, p.208.
(69) *Ibid.*, p.207.
(70) Eisenhower, *op.cit.*, p.339.
(71) *Ibid.*, p.340.
(72) Niños Heroes に対する神話性については，山崎眞次「米墨戦争と英雄幼年兵」(『教養諸学研究』106号，1999年)，pp.270-280．英雄少年の6名とは，Agustín Melgan, Juan Escutia, Fernando Montes de Oca, Vicente Suárez, Francisico Márquez, Juan de la Barrera とされている。
(73) Miller, *op.cit.*, pp.104-112.
(74) Martínez, *op.cit.*, p.342.
(75) Donald S. Frazier (ed.), *The United States and Mexico at War: Nineteenth-Century Expansionism and Conflict* (New York: Macmillan Reference, 1998), p.98.
(76) Martínez, *op.cit.*, pp.202-205.
(77) 山岸前掲書，p.233.